

## その「罪と罰」

酒井 敏

(東京家政学院大学教授)

私のワイルドとの接触は、学生時代に読んだ『獄中記』から始まっているが、その当時不思議に思ったのは、一般の文学史などで得ていた先入観と、『獄中記』を通して描いたワイルド像との間の、意外に大きなギャップであった。ワイルドといえば、背徳的な唯美主義の作家、デカダンス文学の代表者として、十九世紀末英文学の一隅に毒々しい異彩を放つ存在と見なされがちであるにも拘らず、私の初めて接したワイルドは、余りにも真面目で、むしろ小心な位に一途な魂の殉教者という印象であった。

その後、私の手にしたワイルドに関する評伝や解説の多くは、彼をウィットと逆説の名人として扱い、すべてを仮面とポーズの下に装っているダンディというレッテルを貼っていた。私は何となく腑におちないまま、彼の作品を小説、戯曲、評論、詩、童話へと読み進んでいった。たしかに、そこには機知とパラドックスに富んだ警句が満ち溢れ、ダンディズムとしか名付けようのない人工的な美への追求のあることが分かった。だが、それでもなお私の最初の印象は、依然として消え去らなかつた。というよりも、むしろ私には、世紀末の狂い咲きの存在という彼のイメージのどこかに、不当な歪みがあるような気がして、このワイルド像を消したくなかつた。私のワイルドへの傾倒は、何とかして彼の汚名をそそいでやれないものかという、いささか子供じみた正義感みたいなものから始まったといえなくもない。

1895年1月3日に『理想の夫』の舞台が、プリンス・オブ・ウェルズ臨席の下で、初日の幕を開けた。次いで2月14日には『真面目が肝心』の上演で、ワイルドの名声は絶頂に達していた。その同じ月の18日、クィンズベリ侯からの運命を決するカードが届けられ、一挙に絶頂から奈落への転落が始まる。ワイルドは『獄中記』の中で、「私の人生における二つの重大な転換期は、父が私をオックスフォードに送った時、そして、社会が私を牢獄へ送った時であった。」とのべている。私はかつてこの二つの転換期のうち、前者に始まるオックスフォード時代について、「異端と正統の間で」と題する小論を書いたことがある(昭和57年12月 東京家政学院大学紀要第2号所載)。

ワイルドがオックスフォードに入学したのは1874年の10月、恐らくその頃に始まったと思われる悪習のため、クィンズベリ侯との紛争の起こるのが、1894年の半ばからである。その間の20年を、ワイルドは丁度時計の振子のように、二つの極の間を常に大きく揺れ動いてきたと思われる。実は、ここで二つの極を「異端」と「正統」という語で表わすのに

は、若干のためらいがある。一方が正しく、他方が間違いであるという誤解を避けるためには、むしろ具体的にペイガニズムとカトリシズムとした方がよいかも知れない。そして、幼児洗礼と臨終の際の終油の秘蹟は別として、ワイルドが生涯の中で最もカトリシズムに近付いたのは、この二つの転換期であったことも、最近の研究で次第に明確にされてきている。

ただ、ワイルドとカトリシズムとの関係は、まだまだ多くの疑問符をつけられている命題であって、これをしも又ワイルドの仮面であり、ポーズであるということであれば、議論は堂々めぐりになって容易に結論は出ないにしても、ワイルド自身のいう「仮面をつけた時、芸術的人間は初めて真の自己になれる」という立場からすれば、仮面こそが彼の素面であり、ポーズをとっているから本音が出るとも考えられる。

1895年4月、ワイルドの方から告訴した裁判が、始まったとたんワイルドの敗訴に終わり、逆に逮捕されて第一回公判では、陪審員の不一致で一旦は保釈になったものの、第二回の裁判で有罪となり、同年5月末に懲役2年の判決を受け、あの致命的な服役生活に入る。その間に、ワイルドは国外へ逃避しようと思えばできないことはなかつたにも拘わらず、敢えてそれをしなかつたのは何故か、ということがよく憶測される。

十九世紀ヴィクトリア朝社会の偽善と功利主義にレジストして、進んでスケイプ・ゴートになろうとしたなどという英雄気取りは、まさか当時のワイルドにもなかつたと思われるが、しかも、この時ほど彼は、人間の罪の重さということを感じたことはなかつたのではないか。『獄中記』の中で、彼は「自分は身に覚えのある罪は勿論のこと、身に覚えのない罪で社会から糾弾されたが、それ以上に身に覚えがあつて、しかも社会から糾弾されなかつた罪も沢山ある。」といっている。

私は、2年間の獄中生活が人間ワイルドを決定的に変えたとは思えない。ただ、1895年から1900年までの5年間のワイルド像から、それまでの軌跡を逆探知していくと、そこには少し大げさにいえば、近代と現代の裂け目にある罪と救い、神と悪魔の問題が介在しているような気がしてならない。

近代のヨーロッパでは、ルネッサンス以来の合理主義とヒューマニズムが、罪を罰しようとして救いを忘れ、悪魔を追放しようとして神を見失ってしまいがちであった。十九世紀の浪漫主義とリアリズムが避けて通ってきた美と悪の倫理、背徳と贖罪の問題を芸術のレヴェルで取り上げたのは、ボードレールやユイスマンスと並んで、英国世紀末の文人達であったといえよう。ワイルドが二つの極の間の振幅の中にあつて、近代文明の精神的な浅薄さのいけにえとなりながら、ひそかに新しい世紀の到来を待ち望んでいた時代に、我が国の文壇ではどうかといえば、まだ明治中期の戯作者(紅葉、柳浪、鏡花等)の文学が残っていて、藤村、花袋の自然主義すら現れていなかったのを見ると、日本の近代化はやはりおそかつたことを痛感せざるを得ない。